

時空を飛ぶ(序)

ベランダ雑感(記) H・I M A G I N E

(起床後、コップ一杯の水を飲み、仏壇に手を合わせ、ベランダで景色を眺めながらほぼ三十分間運動するのがすっかりルーティンとなった。十年前の罹病を切っ掛けに始めた。ストレッチ運動を主体にしてリンパマッサージも加え、大気を吸い込んだ全身が心地よく、怠れなくなった。罹病が無ければやらなかったかも知れない)

マンションのこの部屋は、僕がエレベーターが苦手で二階を選んだ。普段もつぱら階段を使って生活している。玄関側はまさに二階だが、反対のベランダ側は三階の高さでほぼ南西向き、そこから車道と並行した歩道を見下ろすようになる。

その道はかつて沢であったそうで、沿道では馬を引いて上り下りしていたという。今の地名は馬引沢。いかにも沢の名残りというのだろう、未だに春には鶯の谷渡り(枝から枝へ渡りながらホーホケキョ、ケキョケキョケキョ・・・)が聴けたりする。

ベランダは、前面一・三m×幅五・八mでちよつと前面が狭い。

春遅くから落葉までは、道路以外はほぼ街路樹の落葉高木ユリノキを中心にカエデやイチヨウ等の樹木が景色を覆って、中景のマンション・家屋や遠景の多摩丘陵は見えにくい。

ベランダからの視界は狭いが、ここで思い巡らす吾が空想は視野に構わず多摩丘陵から世界へ、そしていつか身を置くであろう天空へ飛んでみたいと思っている。

蝉の読経

さて、「この夏は、暑さのせいか、蝉の声が静かだったように思う。」

例年なら朝から、うるさい！と言いたくなるほど盛大に大合唱。

その蟬は、六月下旬ごろからジューーーーーッと小振りのニイニイゼミがいち早く鳴き出し、夏が始まったなと思う。

それからはアブラゼミ。まるで、ひと昔前の鉄道の発車ベルのような大合唱となる。ジリジリジリジリ・・・と朝早くから一日中鳴いているとばかり思っていたが、しばらく鳴いてから昼頃まで一斉に鳴き止んでいた。どこかに一斉に移動したのかと思いきや、そうでなく、お休みしているらしい。そして昼頃から夕方まで発車ベルを急くように鳴らし続ける。夜に名残り惜しいように鳴いている輩もいる。なお、春に登場するというハルゼミはこの辺りでは聴いたことが無い。

そして、何といっても、主役はミンミンゼミ。

近くで耳にするとお腹に重厚な響きの存在感があり、八月に入ると、あたかも戦没者を供養するかのような読経の主役となって、そこにアブラが合唱を添える、思わず手を合わせたくなる。

秋めいてくると、シャン、シャン、シャン・・・と透명한鳴き声のクマゼミ。オーシーツク、オーシーツク・・・と可愛らしいツクツクボウシが混じり、やがてカナカナ・・・のヒグラシで秋の到来を告げる。

珍しく、目の前のユリノキの幹に空蟬がひとつ。

野鳥もウグイスの他、いろいろ。時にはキツツキが幹をつつくドリングの響きを聴くことがある。カラス類の鳴き方もいろいろあって、何年も前から道路向こうのユリノキに巣をつくる一家はしわがれ声を遺伝しているらしく、少し判別できるようになった。

この辺りは、蝶もいろいろ飛び回る、まさに郊外の田舎である。

(続く)